



「三方よし」の2学期に

校長 田邊 雅也

よさこい^(※) 鳴子踊り、4年ぶりの躍動

彩夏祭（さいかさい）は、朝霞市民が誇る祭りです。1学期、5年生の総合的な学習の時間で行った、朝霞市民への「街角インタビュー」では、朝霞自慢として、堂々の第1位となっています。市内でも多くの団体が参加していた「よさこい」が、コロナ禍により活動休止を余儀なくされ、六小学区でも「よさこい」の火が消えたのではないかと、とも思われていました。しかし、朝霞市を愛してやまない地域の皆さんの熱意により、4年ぶりに、動き出すことができました。想像をはるかに上回る希望者があり、驚きを隠せませんでした。

当日は炎天下でしたが、熱気を上回る気持ちのこもった演舞が行われ、参加した子供たちも、応援した子供たちも、支えてきた保護者・地域の皆さんも、迫力ある演舞に感動しました。

彩夏祭の成長の歴史

彩夏祭は、毎年、8月の第1日曜日に合わせた金・土・日に開催されています。昭和59年、都市化と情報化が進み、便利な世の中になる一方で、地域への愛着や連帯感、人と人との繋がりが薄れていくことに危機感を抱いた市民の手によって始められました。開催当初は、盆踊りと打上げ花火が中心で、今のように大きな規模ではなかったようです。最も注目を集める「関八州よさこいフェスタ」は、平成6年（第11回）から始まり、本州では最古の歴史があります。また、彩夏祭という愛称は、平成7年（第12回）に、市民の公募により選ばれました。そして、コロナ禍を乗り越え、約70万人もの方が来場する、朝霞市民による、夏の一大イベントに成長し、今年で、40回目を迎えました。

彩夏祭にはウェルビーイングの深化がある

すでに社会人となった20代の我が子が、彩夏祭の時期に合わせて実家に帰ってくる、という話を地域の方から聞きました。彩夏祭の発展の歴史から考えると、子供の成長と共に、人と人とのつながりや、地域コミュニティの醸成を目指した「ふるさとの祭り」になっているからです。幼い頃からの心と心の絆が、大人になった今でも、朝霞の街に引き寄せているのです。その絆は、自分の幸せ、出会った人の幸せにつながり、そして地域社会の幸せにもつながっています。彩夏祭は、40年もの時間をかけ、ウェルビーイング（幸せ）を深化させ、熟成されているように映りました。

体育発表会で3年生が「よさこい」を演舞

10月の体育発表会でも取り入れたらどうか、という案が、本校学校運営協議会の委員さんから出されました。地域のよさこい関係者のご協力もいただき、3年生で実現することになりました。夏休み前に、iPad内のTeamsに、地域の協力を得て、演舞内容の動画が配信されました。子供たちは、個人練習をしたり、彩夏祭で実際に演舞したり、沿道で応援したりしました。

3年生では、社会科で、朝霞市のことを学ぶので、朝霞市民の一員としてのオーセンティックな学びにつなげることも期待されます。ただ演舞するだけではでなく、彩夏祭や「よさこい」の歴史、市民の思いも、学びの中で実感できたら素晴らしいです。同時に、六小学区の「よさこい」も盛り上げれば、地域にとっても最高です。子供も、学校も、保護者・地域も、Win・Win・Winの関係になるのではないのでしょうか。

「三方よし」で「未来よし」

近江（滋賀県）を拠点に、江戸から明治にかけて日本各地で活躍した近江商人の「三方よし」を連想します。「買い手よし、売り手よし、世間よし」の「三方よし」は、利益追求のみならず、多くの人に喜ばれる商品の提供、その上で、橋や学校を建築するなど、「世のため、人のため」になる社会貢献にまで及びます。それ故、現代の企業経営哲学にも大きな影響を与えています。彩夏祭が、「自分よし、市民よし、朝霞市よし」の「三方よし」なのであれば、学校が目指すのは、「子供よし、学校よし、保護者・地域よし」と考えます。

オーセンティックでウェルビーイングのある教育活動を、保護者・地域と「共創」し、子供たちを「共育」していくことで、「三方よし」となり、その営みが、「未来よし」につながったら最高です。試行錯誤の連続ですが、2学期も、ご理解、ご協力のほど、よろしくお願ひします。

※よさこい…昭和29年に、戦後不況の中で経済復興・地域復興を目的に、高知市で始まりました。鳴子（なるこ）という鳴り物と、彩り豊かな衣装で艶やかに乱舞します。近年、全国に広がり、個性あふれるパフォーマンスが誕生しています。